

「大杉栄の旅」小感 (1)

秋 山 清

大杉栄の思想の変化、いや成長発展を追っての小さな旅行に一遍問ばかり費した今、私は、これは一体何の意味があることか、といういさかきびしい思いを味わっている。といっても、私はそのことが無駄だとか、無意味だったとか思っているのではなく、むしろそれとは反対なのである。

もう五十年、そこに誰がいるのでもなく、研究者や同感する後輩がいるのでもない場所を見て歩くことが、私が大杉栄をもっと知るために何のプラスであるかという思いに先行されていたこれまでの自分の考えに、些少ではあっても、はじめてのような、動揺があったと、いうことにもなるのであろうか。だから私は改めて私の歩いた「大杉の旅」をふりかえってみようとするのである。

日本の文学や思想の歴史の中にふりかえられつつ、なお現代とかかり合って記憶されている人、啄木とか藤村とか、九州の筑後柳川の白秋とか、ゆかりの土地にふさわしい記念碑などもあちこちに建っている中に、いわゆる観光ブームとかかわって、あらずもがなのモノもずいぶん建てられているような、いくらか贅贅的

に、その土地との縁の厚薄さえもおかまなしに、と見えるものも流行現象的に存在している。

しかしさすがにわが大杉栄にはそんなものはない。有りようがないというべきかもしれない。これは喜ばしいことだ。わが国の大正の思想と社会運動とを語るために欠落させることのできない存在であることはうらはらに、碑を建てるなどのいさかセンシメンタルな感情はまったく大杉にはふさわしくない。もっと彼は大人である。大人であるということは、日本人の郷党的な（こいつがまた時には大逆反動的な役割もする）精神や朋党的な情調から彼は、程遠い存在だということである。

すこしばかり知名であれば、すぐわが故郷の出身者だといって語りたがるような傾向の中で、大杉栄をわが郷党的のはこりだといった人、書いた人を私はしらない。彼は今もって、どこの土地からも、どの政党からも、敵視され異端視されていて不思議のない人物である。

記念碑を建てるには大人っぽすぎるという私の感想は、この郷党

の誇りとはならない大杉栄の存在と生き方から来るものである。明治の社会主義者として幸徳秋水と並ぶ堺利彦も、戦後、福岡県京都郡豊津に碑が建てられたときいている。幸徳秋水だって郷里中村の墓は、今や陽の当るものとなっているかのようであり、郷里の人々から受け入れられ、語りつがれる存在となりつつあるかに思える。それに比べて大正を代表する反逆児大杉には全くそれがない、ということに私は特別な感想をもつのである。このことが越後国新発田から、神奈川県葉山の日蔭茶屋、鎌倉市の小町、東京本郷の駒込片町十五番地の労働運動社跡から、北九州市八幡の有楽座（大正十一年二月に岩佐、近藤、和田（久）らと西下して、八幡製鉄所大争議の記念集會に大杉が出席した場所）の跡地を訪ねて得た私の、総括的な感想である。

もうすこしこだわっていえば、記念碑の出来る筈もない程、大杉は現在に生きている、ということではないだろうか。すくなくとも過去の存在でありながら現在を睥睨しているのが大杉栄、あるいは彼の思想だ、ということではあるまいか。日本人全体からわが友、わが郷党と親しげにいわれるにはその反抗心は、戦後三十年に近い現在の日本民衆の、怯懦で現状維持な心情と対立するものとして存在しつつあるのではないだろうか。

大杉栄には故郷というべきものがない。軍人であった父の、命ぜられての転任のままに、生涯の地の四国丸亀から、生れたその年に東京に移り、麴町の番町に住んで幼稚園に入り、さらに秋ふかい信濃路の軽井沢を馬車で越えて（当時まだ信越線すら通じてなかった）、越後も北の新発田に行ったときはようやく六歳、運よくそこでは小学校から中学二年まで修了して、名古屋の陸軍幼年学校に入っ

たが、そこも退学を命ぜられ、やがて新発田の町から上京した。ふるさととは父祖伝来の地に生い育つという幸運によつてはじめて深くその情感が育ぐくまれるものである。大杉は幼年から青年期の入口まで新発田の人であったが、一家を挙げて、軍人というその土地のヨソ者でしかなかった。だが生い育つた土地への感情というべきものは彼にもあって、その自叙伝は、もともと思い出深く新発田と、幼少年の頃のことを書いている。

一九七三年の八月の末にその新発田を訪れて、元の陸軍連隊の跡に在る自衛隊を訪れ、そこを足場のようにして、営庭やかつて将校住宅の在った町、幼年の大杉が遊んだのはこらであろうと、今の自衛隊外の広場や、大杉が虎公という友だちと百合の根を掘りにいって、穫物をみんな貧しいその友だちにやっつけてしまつて、母をなぐさめるのに百合の花をとってかえり、母から「根のほうを持ってくればいいのにね。ほんとうにお前は馬鹿だよ。——」といわれたという加治山や沢ガニ狩りをした五十公野山なども、自衛隊前の広場からそれぞれの方向にかすかに青く望まれた。軍人の子として大杉がただの少年であった姿を、いまの新発田からは遠い昔の街の姿に復元しつつ思いみると、この街が故郷のなかつた大杉の、やはり故郷であることを思わないわけにはいかなかった。同時に、郷党によつて何か記念の碑くらいあってもおかしくはない大杉栄の知名度ではあっても、将来もおそらくそのことの実現はまずまずないだろうという思いほど、大杉の存在をさすがしく語るものはないであろうと思った。

いいかえれば、大杉のゆかりの地というものは、おそらくこれから後にも、物語りのように伝えられることはあっても、そのしかと

した場所、そこにかかわる事実などはしだいに不たしかとなってゆくしかないであろう。いついつまでも、その時代々々の脚光をあびる存在とは永く対立しつづけるのが、大杉の思想と行動だったからである。

新発田について一番確かめてみたかったのはその年譜の
一八九一年（明治二十四年）四月、新発田本村の尋常小学校に入
学、成績優秀、餓鬼大将。『日本の名著・大杉栄』

とある「本村小学校」のことだった。モトムラと読むのか、モトノムラ、ホンソン、ホンムラという幾通りかの読み方が可能である。新発田にいて、ようやくそのことがわかったのは、自衛隊内で休んでいた時、隊内のある人の父が今は市から少し離れたところに住んでいるが、新発田の古い人だということから、その隊員に、父親に電話できいて貰ったからであった。本村を何と読むか、今もその小学校は在るのか、無ければその跡は、とさくと誰もが、サアといって首をかしげた。それがようやくと本村尋常小学校と知れ、そこが今は新発田の郵便局になっているというので、かえりの自動車をそこに回わして貰ってその前を通って見たりした。どうでもいいようなことだけれど、これだけのことにいくらかの時間と土地の人の協力が必要だったのである。ことのついでに彼が通った新発田中学校（今は新発田高校）の前も通ってみた。

越後の新発田は今もあまり大きな街ではない。元城下町、明治大正には陸軍の、いまでは自衛隊の存在がもつとも目立つ存在といったところ、つまり日本のある体臭の今もふんふんたる土地、大杉栄はこの地の空気の中に少年の自己を育成したのである。特別のことのない地方の小さな街、その土地の影響から極くわずかなものをつ

かみとって、大杉栄は成長したということである。
少年大杉が遊び場にしたのは、むろん当時の（今も）営庭ではなく、兵営外の練兵場であろう、とすれば将校住宅から近い営庭前の広い原っぱのあたりだろう、という推定から、その古い松の木の下に立って幾枚か写真も撮った。年々歳々人同じからず、ふとそのときにわずかな感傷があった。在りし日の幼い大杉栄が立ったのかもしれないぬその古い松の木の下、熱い夏の夕方近く、埒もない回想の文章を書くために、私はいまは野球場もある元練兵場の一角に佇んだのである。

新発田から新潟をまわって帰った翌日、私は葉山の日蔭の茶屋に行ってみた。あの事件で有名な日蔭の茶屋が今もそこに在るかなどと考えたこともなかったが、在るときいて、行ってみたのである。これは感傷ぶかいものがあつた。古いことをその跡地に訪ねて回想するというのは感傷は私のあまり好きなことではないが、「神近大杉を刺す」という事件は痴情のはての刃傷で有名なだけである、にもかかわらず、私は「日蔭の茶屋」にしばらくいて感傷に打たれた。大杉栄を考えると、ここでの事件を契機として大杉栄のアナキズムは拡大し、活動の時を迎えたのだ、という思いを消しがたかったからである。

数年前、当時（大正五年十一月七日）の刃傷事件にかかわる新聞記事を読んで読んでいて神近市子の言葉に感銘したことを、思い出した。神近が葉山の日蔭の茶屋で、大杉を刺した後の公判廷で云った言葉がそこにあつたのである。

「私は嫉妬に狂って大杉を刺した」というのを読んだとき、神近としてこれ以上の言葉はないとおもひ、ふかく記憶にとどめたので

ある。ある時に、ある怒りに前後を見失うことのできる、という一途さをわれわれはもういふん忘れてるのではあるまいか。葉山の刃傷事件は、道徳的にほとんどの同志たちがこれによって大杉を見限り、見はなし、ふかい思索を大杉に要求したのではなかったかと思う。神近がもし大杉を刺さなかったら、大杉はこのイヤらしく面な関係を如何ように処理し、その後の活動を推進し得たか、疑問というに足りることだ。これによって大杉は、明治期以来の同志たちから、妻の堀保子、恋人の神近、そして道徳の好きな世間、それらのほとんど全部から見はなされてしまった。いわば自分の行為によって行きつまったのである。むろん、前非を後悔し、などということではなく、観念的にはきっぱり出来る事であつたとしても現実には、それは容易ならざるもので、きっぱりした処理はたやすいものではなかった筈、神近の前後を失ったらしい刃傷沙汰ほど、大杉栄の、その後の活動に資したものは少なかった、といいたい思いがするほどである。『法学セミナー』十月号に『史談裁判・第四集・13』として「葉山日蔭茶屋事件」（森長英三郎）の記事があつて、「日本の女の運命を背負って立つた人」とサブタイトルがあり、私はその、次のような結論にすこぶる同意した。「この事件により、大杉は、堺利彦、山崎今朝弥がなかにはいり、保子とも正式に別れ、野枝だけが夫の大杉の妻となった。一時同志から非難され孤立した大杉も、その実力があることからもりかえし、ただ神近だけが、二年間を入獄するという損な役割りを受け負わされた。」

現実はこの通りであつた。がもし、その時から六十年近くたった今日、これと同じ恋愛問題が起つたとしたら、当事者たちはもっと上手に事態を処理したのではあるまいか。大杉も含めて、葉山日蔭

茶屋の刃傷事件にかかわった人々は、彼の同志たちも、自由についてまだ極めて理解が弱く、旧道徳的感情によって批判し、進退したかのような印象がつよい。大杉は実力があつたからもあり返した、というのとは事実として、その実力とは何か。私は自由についての要求の強さとふかきにおいてすぐれて貪欲だったからだと思う。「ただひとりの人を得ることをもて大願とせし若きあやまち」といった意味のことを啄木がかいたことがあつた。大杉は日蔭茶屋事件によって一人の恋人伊藤野枝を得たが、従来の恋愛事件は、このような結着が生涯の終止符のごとくになりかねないが、大杉・伊藤にはそれが次の活動への出発点であつた。アナキスト大杉の活動はこの事件を契機としたかとすら考えられる。大杉は神近の刃傷によって命を落したかもしれない危険を犯したが、この契機は大きかつた。

いま、日蔭茶屋は元のところ、葉山町堀内の鰐摺に在り、現在「ひかげ茶屋」と改められてゐる。その前に一度日影茶屋となつたこともあつたというのがこの改名にふかい意味はないらしく、経営者の好みによるらしい。大杉が刺されたという部屋は現在もその木造二階建のままに残っており、人手不足から昨年以來旅館を止めにして、現在隠居の老夫婦の住いになっているとか。その部屋のすぐ前の庭に車井戸があり、神近の刃傷をきいて駆けつけた宮嶋資夫が、井戸端で洗いのものをしていた伊藤野枝を「貴様が悪いのだ」とか何んとかいて手にしていた番傘で殴りつけたというのはこの井戸のことだろうか、その今も豊かな水の汲めるといふ井戸のあたりのたたずまいを、しばらく立つてながめた。昨日のこのようでもあり、古いむかしはなしの如くでもあるその事件に、自分の関心がふかくなっている、そのことの何故かをあらためて顧みる思いだっ

た。

ささやかな大杉の旅の記事を『朝日新聞』にかく約束をしたとき、私は、日蔭の茶屋事件など無視してもいいんじゃないかと軽くかんがえていた。新発田に行ったかえりの汽車のなかで、半分居眠りつつ、明日行く葉山と鎌倉の、大杉の動静をかんがえたとき、日蔭の茶屋事件を無視したり、軽く扱ったりすることは、とんだ間違いではないかと思いついた。大杉の生涯を、幼少年期を別にして、平民社に出入しはじめた明治三十六年（一九〇三）から大正一二年（一九二三）の二〇年間と見て、その前後を区切るものが、葉山の事件ではないか、とふと思った。大杉が神近に刺されたのは大正五年（一九一六年）、三十一歳であった。この時から死までのまる七年間こそがアナキスト大杉の活動期であった。もちろんその以前に、大杉にアナキズムの活動がなかったというのではないが、革命家的風貌を備えた活動はこれから後であった。

この事件によって、自由恋愛を完成（あるいは清算）し、労働者への期待を、自身の実行によって現実化し、第一次世界戦争後の世界的な革命状況に応じた活動を、いささかなりとも展開し得たのであった。大杉のように世界の革命状況に応じた視野をもち、行動にそれを実現しようとした社会主義的活動家はわが国にはいなかったといえるのではないか。大杉のこの時期（大正七年から関東震災まで）の視野は、もっとも世界の動向に敏感、そしてアナキズムをもって革命運動の理論として展開せんとしたものであった。

かえりみて今、日蔭茶屋の事件以後、旧来の同志と友人から村木源次郎一人を除いて、見捨られた後に、わが国の労働運動に彼の影響が出はじめたことほど、「大杉らしい」成行きはすくない

であろう。というのはこれはマイナスの果てがプラスに通じた見本のような、といっているものだからである。すべての成行きは大杉自身の活動ばかりによって結集したものではなかった。久板卯之助、和田久太郎が居て彼らの、労働者とのつながりが大杉を迎えたというべきものであり、また別に、拡大してゆく友愛会系の労資協調主義的な労組の組織とその運動が、ロシア革命を知った階級的な感覚をもつ労働者にあきたらぬ現状があり、渡辺政太郎の周辺に集まった労働者の戦闘的意識がここに合体するという幸運なめぐり合わせもあったといえるであろう。これらの労働者意識が指向するものは、より戦闘的な労働者の主体的活動であり、大杉が研究してきたアナルコ・サンジカリズムはちょうど、そこに合致する性格であった。すなわちこれは大杉の戦闘的な意識が物をいったということであろう。大杉にとって刳頸の同志ともいうべき村木源次郎のこの間の活動は表面的にはなく行われ、わが国の社会主義的な労働運動の一方の注目は彼に集まらざるを得ないという情勢を生じたのである。

私が大杉における葉山事件から、ここまで類推するのは、あの事件以来野枝と生活を共にしつつ、食うにさえ飢えんとした中から、労働者とともに次の活動を戦闘的に予見しつつ備えた、そのことの契機が葉山の日蔭茶屋の事件以後に現実的となった、と見るからに他ならない。この事件をもって、大杉の生涯とその活動の分岐点とするのはこうした理由からである。

事件の性格は、世間的いうなら痴情のはての刃傷沙汰というをばからない。当事者の神近は裁判に当って、自分のその時の心境をそのようにいつている。それはそれで見事である。痴情に自分をか

け得るということは、それなりに精いっぱいのものであるとしなければならぬ。うらやましいくらいに思いつめ得ることは、人の生涯に幾度もあり得ないことにちがいない。同時にそれは刺された大杉にとってもこの上ない契機となったのである。それをこの上ない転機となし得たところに、恋愛の自由を、社会的世間的な道徳者たちからの悪評をはねかえして貫いたバイタリティある意志力、その大杉だったからこそ、と思わせるものがある。何としても日蔭茶屋は、忘れることのできない事件の場であり、大杉研究に欠かせないものと、私は考えたのである。

私が大杉の名をいうと、今そのレストラン「ひかげ茶屋」で働いている五十がらみのおばさんや若い給仕の人たちが、皆事件のことを知っていて、刃傷の部屋や井戸の在り場所なども教えてくれた。それはあの大正期の事件が、ここに語り伝えられていることが確認されたということであろう。その人たちが「大杉さんの事件」としてそれを知っていたのも、思いがけないことであった。ついでにいえば、ひかげ茶屋、あるいは元の名の日蔭の茶屋は鎌倉時代から、三浦半島を往来するには欠かせない古い建場だったということである。

大杉は逗子にも幾たびか住んでいる。江口渙の書いたものによると、江口が、その逗子の大杉家に訪問中、電気工の姿で中浜鉄が来て、何か大杉と密談して帰った、それは大正十一年の英国皇太子暗殺計画に絡まることらしいと彼は書いている。事の真偽はともかくとして、その時期大杉は逗子の桜山という所に住んでいた。大杉は二度くらいそのあたりに居たはずだが、私は蒼惶の間にそこをたしかめる時間がなかった。

大杉が鎌倉の小町に住んでいたことは、大正九年の社会主義同盟のときのことや、また後にフランスから帰って書いた『日本脱出記』に、同じ大正九年に彼が上海にひらかれた極東社会主義会議に出席のために、ひそかに日本を脱出したときも、鎌倉のその家からいささかの変装とともに抜け出したことを語っている。そのとき、それといわずに信友会の桑原鍊太郎に荷物を運んで貰ったことをかき、その本人の桑原さんから、戦後すぐのときにそのはなしをじかに聞いた記憶もある。

上海に行くために大杉がそこから抜け出した家は、今洗濯屋になっている、ときいたことがある。その後地震があったのだから、そのときと同じ家か否かはわからないが、ともかくその、鎌倉市小町瀬戸小路の、今クリーニング屋になっている所にいつてみた。

そこは、前に話をきいていたように（元大杉のいた家がクリーニング屋になって今も在るということ）、村木源次郎の従弟の長芝義司さんから聞いた、今は鎌倉駅に近いぎやかな通りの一角に在った。昔はその狭い道をへだてて警察の見張小屋があつて、そこらは当時空地だったらしいが、現在はすっかり建込んでいます。

その家の前に立って私は、大杉が鎌倉または逗子にいた期間は断続的に可成長かつたようだが、その頃のことを自分があまり知っていない、ということその時あらためて思った。「大杉の旅」などいいながら、鎌倉にいた頃の大杉の活動について、私はまことに暗いのである。（つづく）

船の思想(1)

菅 田 正 昭

1

くにのまわりを海で取り囲まれた島国ニッポンにとって、古来から海を乗り切るための交通手段としての船の持つ位地は大きかった。そこでわたしは考えるのだが、日本人を構成してきた人びとが、船という水上の乗物を、己れの精神史の上でいったい、どのように考えてきたか、を、わたしは知りたくおもうのである。

では、いったい船とはなにか。船とは、古代の日本人にとって、水上に浮べる乗物であると同時に、容器でもあった。容器としてのフネの意味は、風呂のことを今日でも湯舟というごとく現代語にも遺っている。

たとえば、『日本霊異記』（道場法師伝）には「我が爲に桶の船を作り、水を入れ、竹の葉を^{うか}せて賜へ」とあるように、フネとは水をもるための容器であった。つまり、大型のいれものや、箱は船舶と同様にフネと呼ばれていたのである。

2

『古事記』によると、イザナギ、イザナミの二神の生んだ神々の中に《鳥之石楠船神》という神がおられる。この神は別名を《天鳥船》ともいい、神話における功績としては、大国主に国譲りを迫るために高天原から出雲に降ったタケミカヅチに同行している、ということである。ところで、鳥之石楠船神という神名はどこからきているか。武田祐吉氏によれば、「鳥の如く早く行くところ、石のように堅いクスノキの船」（角川文庫版『古事記』訳註）であり、倉野憲司氏によれば、「鳥のように天空や海上を通う楠製の丈夫な船の意」（岩波文庫版『古事記』訳註）であるという。この場合、船の材質としての楠は、この木が大樹になりやすいこと、および腐敗しにくいこと、の二点により刳舟を造るのに適した材木である、ということである。このことは、縄文時代の遺物として発掘される丸木船のほとんどが楠製である、ということでも証明できよう。

それはさておき、神名中の《鳥》と《船》との連結のありようは

何を示しているか。西郷信綱氏によれば、「船に鳥を冠するのは、鳥の海上や空を行くことの早いのにちなんだもの」であるという。わたしにいわせれば、西郷氏のこの見解は古典学者としては致命的な誤まりを持っている。つまり、氏の見解には、《常世》の契機が欠落している。わたしがこのことを強調するのは、わたしは、鳥之石楠船神が常世の国からやって来られた、と考えているからであり、そしてそのように考えた方が、古代人の自然観や信仰観からして《鳥》と《船》との結合がより自然に解明できるからである。

古代人は太陽や月の出入を眺めることによって天と海を同一のよう感じていた。いいかえれば、古代人にとっては、《常世の国》とは、海の、あるいは天のむこうに存在する国なのである。したがって、古代人には、鳥と船とは、常世の国と己れの住む国のあいだを自由に往来するところの、あくがれの対象だったのである。つまり、鳥之石楠船神とは常世の国から寄り来る神であつたに相違ないのである。

また西郷氏は「いわゆる船の神であるならば、船霊への暗示があつて然るべきはずなのにその気配がまったくない」などと、とんだところでこの神に言いがかりをつける。たしかに、『古事記』の文脈では、この神の船霊への暗示は乏しい。がしかし、西郷氏もふれているがごとく——にもかかわらず氏の場合には常世の契機が欠落しているため船霊の暗示を感じない——『日本書紀』の《一書》では、この神（《船》）はかのヒルコを乗せていることで船霊的な性格も帯びているのである。

ところで、このヒルコとは、イザナギ、イザナミの夫婦交合の結果淡島と共に誕生された、本来は貴い長子ではあるけれども、本つ

教えにあわなかったということ、ふさわしくない子として捨てられてしまっている。彼は、『古事記』によれば《葦船》に入れられて、また『日本書紀』の本文では《天磐櫓船》、『紀』の一書では《鳥磐櫓船》に乘せられて流し捨てられている。そして彼、ヒルコは両親たる二神の《御子》としては認知されていないけれども、彼の《棄児》としてのありようの異常なことで、かえって神聖な御子としての存在が想像されうるのである。つまり、ヒルコは太陽の子として、いちはやく《常世の国》へ回歸している貴子でもあるのだ。

わたしのいう船霊的性格は、実は、ここから由来する。ヒルコが日の出とともに常世の国から寄り来し、日の入りとともに常世の国に帰還することは、彼がすくなくとも海、否、船の安全を守護しているということである。つまり彼は船の航行を司さる船霊の神なのである。今日、多くの漁民たちがこのヒルコを漁業の神・エビスサマとして祭っていることは、この意味からしてむしろ当然のなりゆきである。

それはとにかく、高天原からこの国土へ降ったり、あるいは遙けき海洋を越えて行くのには鳥が最もふさわしい存在である。この意味では、鳥之石楠船神の別称である《天鳥船》という御名は誠に的を得た神名である。

にもかかわらず、船と鳥との関係は古代人の信仰観に基づく天と海との関係ばかりから推察されるものではない。たとえば、沖繩の《おもろさうし》の中には、つぎのような箇所がある。

御船の高嶺に
白鳥が居ちゃん

白鳥やあらぬ
おみなりおすじ

この歌の大意は、船（サバニと呼ばれる刳舟）にとまっている鳥はおなりの生御魂である、ということである。この場合、《おなり》とは姉妹のことを意味しているが、と同時に沖繩の姫彦制におけるおなり神としての意味も持っている。そして白鳥とは白い色をした海鳥であるから、日本武尊が死後白鳥と化し飛び立ったように、おなりの生御魂を宿した依代としては誠にふさわしい。これを別の角度から見れば、《おみなりおすじ》としての《白鳥》はまさしく船霊でもある。

さてここで、ふたたびヒルコとの関係に戻ってみよう。ヒルコが葦船あるいは鳥磐機樟船、天磐機樟船に乗せられて流されたということは、ある種の葬儀に類似している。これと同型の水葬はかつて南洋の島々にも遺っていたようだが、それはともかくとして、この場合の船とは柳田民俗学でいうところの《うつぽ舟》である。

柳田国男は、「うつぽ舟の話」（『妹の力』所収）の中で、つぎのように述べている。

「……海を越えて浮び来る異常の物は、たとえば死人を納めた木の箱の如きもの迄、我々の祖先は一括して、常にこれを「うつぽ舟」と呼ぼうとしたのである。」「うつぽ舟は空洞の木を以て造った舟、すなわち南方の小さい島々に於て、今なほ用ゐられてゐるところの、刳舟丸木舟のことでなければならぬ……」。つまりは遙かなる海の彼方から、因縁あつて来り寄るものは、昔も今もこの舟を必要としたことを知るのである」。

この記述をみてわかることは、楠を刳抜いて造った《天鳥船》

は、《うつぽ舟》でもある。つまり、天鳥船とは、極端にいえば、《棺桶》である可能性もあるのである。わたしが最近見たテレビによると、ニューギニアの海辺の民は今日でも舟を棺として使用している。彼らは生前自分じしんで造り、使っていた刳舟に死後安置され、さらにそれを木の上に置き風葬にするらしい。つまり、ここでの刳舟は祖霊神を安置した容器としての舟でもあるのだ。そして、その刳舟はかつて南洋の海を走り、いま木の上で天に向つて飛翔しようとしている《天鳥船》でもあるのである。

ニューギニアの天鳥船はこうして祖霊たちのいます常世の国へ帰還するわけだが、わたしの想像では、我國の《天鳥船》も同様であったに違いない。つまり、天鳥船とは、祖霊神、船霊神の性格を持った、それ自身も神であり、と同時に神の乗物としてのフネでもあるところの、神であつたと考えることができる。

※引用した西郷信綱氏の所説は、「古事記を読むゆゑ」《未来》一九七一年九月号）に拠る。

3

本朝における大船を造る始めは《枯野》という船である。この船は楠の大樹で造った刳舟だが、『鎌倉実記』という書によると、応神天皇五年甲午、冬十月、伊豆国で造らせたものであるという。

さて、この《枯野》という船にかんする説話は、『古事記』にも載っている。

「この御世に、免寸河の西の方に、高樹あり。その樹の影、朝日に当れば淡路島におよび、夕日に当れば、高安山を越えき。かれこの樹を切りて、船に作れるに、いと捷く行く船なりけり。時にその

船に名づけて枯野といふ。かれこの船を以ちて、旦夕に淡道島の寒泉を酌みて、大御水獻る。この船の壊れたるもちて、塩を焼き、その焼け遣りの木を取りて、琴に作るに、その音七里に聞ゆ。」云々。
（武田祐吉訳註「古事記」）

ここで、わたしたちが注意しておかなければならぬことは、この船が、先きの『鎌倉実記』によれば、長さ十丈もあるという大船であつたにもかかわらず、《水をもるための容器としてのフネ》の性格を持つてゐる、ということである。つまり、枯野は朝夕天皇に大御水をたてまつるために、海を隔てた所から運搬するタンカーであつた、ということである。そしてさらに、注目しておく必要があるのは、枯野の材料となつた楠が朝日、夕日の影で大きさを表現しなければならぬほどの、とほうもない大樹である、という点である。

ところで、実は、これとほぼ同型の説話が、播磨国風土記逸文にもある。この船もやはり楠製の刳舟で、船名を《速鳥》という。

「明石の駅家。駒手の御井は、難波の高津の宮の天皇の御世、楠、井の上に生ひ、朝日には淡路島を蔭し、夕日に大倭島根を蔭しき。よりてその楠を伐りて舟を造りしに、その迅きこと飛ぶがごとく、一楫に七浪を去き越えき。よりて速鳥と号く。ここに、朝夕にこの舟に乗りて、御食供へまつらむために、この井の水を汲むに、一旦、御食の時に堪へざりき。」云々。（小島嬰礼校注「風土記」）

《枯野》と《速鳥》の共通点は、朝日には淡路島をかくし、夕日には高安山あるいは大倭島根をかくすほどの楠の大樹で造られてゐる、ということである。そして、どちらの場合も、天皇の食膳にたてまつるための水を運搬している、ことである。しかも、この場合の天皇とは——《船の思想》にとつては一見蛇足のようにみえるけ

れども、それはともかくとして——難波の高津の宮にゐる大雀の命、すなわち仁徳天皇である。

ところで、朝日、夕日の影で木の大きさを示す説話には、このほかにも肥前国風土記の佐嘉郡、筑後国風土記逸文の三毛の郡などの大樹説話がある。この二説話は船とは直接関係しないけれども、いずれの大樹も楠であるということから、これらも案外船に造られたかも知れない。

さて、朝日、夕日の影で木の大きさを示す、ということは、いったい、何を意味しているか。わたしの考えでは、これは柳田国男のいう《朝日の長者、夕日の長者》《山鳥民譚集》あるいは妹の力「参照」の原型である、とおもわれる。というのは、柳田によれば、朝日さす夕日輝く場所、否、すくなくとも朝日さす場所には寒泉がわいてゐるからである。朝日の長者、夕日の長者はこの宝の泉をくんで長者になるわけだが、《枯野》と《速鳥》の場合は、天皇にたてまつるための宝の泉として用意されてゐるようにおもえる。

と同時に、わたしの考えでは、《朝日》《夕日》という概念には、やはり常世の契機が内包されてゐるようにおもえる。常世と船との関係についてはすでに論及してゐるので再論しないが、常世と船と泉の結合の論理的展開として、《枯野》と《速鳥》の場合は《乗物としてのフネ》《容器としてのフネ》が一体化するのである。

さて、ここで両船における《天鳥船》の思想について見ておこう。速鳥の場合は、すでに論及した方法によつて十分に鳥船であるが、それはともかくとして、わたしは、両船にかんする説話中の天皇がどちらも仁徳である、ということに注目している。これはたんなる

偶然ではない。というのは、仁徳天皇の別称である大雀の命という御名は、ササギ(ミソサザイ)という鳥に由来しているからである。『古事記』の仁徳紀に、天皇が彼の弟速織別王と庶妹女鳥の王を争った、という悲劇的な話がある。これは猛禽のハヤブサとミソサザイ(スズメに似た小鳥)とが女鳥を奪いあったという鳥類物語

が原型であろうといわれているが、『古事記』の説話をいちおうタナアゲして想像すると、この女鳥は白鳥であつたようにおもえる。それはとにかく、つまりは『枯野』にしろ、『速鳥』にしろ、単に大樹と船との関係ばかりでなく、常世と鳥船の関係も大いにある、ということである。(つづく)

三つの“大杉栄”

『無政府地獄』『大杉栄秘録』『労働運動』(覆刻)

大杉栄が伊藤野枝、橘宗一とともに殺されて五十年になる。最近、彼らの死を悼んで三冊の本が相ついで刊行された。安成二郎の文集『無政府地獄』(一二〇〇円 新泉社、当時の『婦人公論』などに載つた大杉、伊藤の追悼記事を覆刻した『大杉栄秘録』(五〇〇円 黒色戦線社 群馬県伊勢崎市中和町和田)、それに大杉の血であり、肉であった『労働運動』(二一四次)の覆刻(五〇〇円 黒色戦線社)である。

『無政府地獄』は、大杉の古くからの友人であり、アルス版『大杉栄全集』の編者の一人でもある安成二郎が、折りにふれて大杉について書いたエッセイや創作をまとめたもので、大杉への終生の友情がどの篇にも美しく滲みみでている。

安成は、有島武郎と大杉の死を扱った創作「二つの死」で、自分が多くの友人を求めず、殆ど孤独でいられたのは、大杉の

ような真実の友人がいたからだ、と述べているが、この逆もまた真であろう。大杉があれだけの仕事をやれたのは、安成をふくめて少数の真実の友人に囲まれていたからに違いない。

『大杉栄秘録』に収められた「僕の見た野枝さん」の筆者和田久太郎もまた、この真実の友人の一人である。この本は『婦人公論』が特集した「殺された野枝さんの事」「甘粕といふ人間批判」を中心に堀保子「大杉と別れるまで」、神近市子「牢獄通信」など、貴重な資料を覆刻している。広津和郎、新居格、平塚らいてふなどの文章もみられる。

しかし、今年の覆刻出版のハイライトは『労働運動』(二一四次)の完全覆刻であろう。『労働運動』の覆刻はこれまで噂に上りながら、完全な原本が得難いこともあって見送られていた。それが、大杉のいま一人の真実の友人近藤憲二氏の遺族所蔵の、久しく門外不出とされていた原本によって覆刻されたのである。この覆刻版の刊行を通じて、われわれはたんに躍動する大杉の精神を感得するだけでなく、彼を支えた少数の真実の友人たちの心意気に感動させられる。